

Title	江戸時代の学習思想(その2) : 陽明学派の人々を中心に
Sub Title	The thought of learning in the Edo period (part 2) : a study on "the Yomei-gaku school"
Author	渡辺, 弘(Watanabe, Hiroshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2000
Jtitle	哲學 No.105 (2000. 12) ,p.109- 135
JaLC DOI	
Abstract	In this paper, I will investigate the thought of learning in the Edo period in which it is thought, from the educational view point, that people learned through activity and independence. Education in this case means supporting people intellectually and emotionally in order to allow them to live a good life. In Analyzing the thought of learnig in the Edo perod, firstly, I will take some people as example who were receptive to the thought of "the Yomei-Gaku School", which was one of the Cofucian schools founded in the Edo period. Secondly I will inquire into both their views of the world (universe) and views of human beings, in order to determine the basis of how their thoughts of learning were formed. In accordace with my previous research, and in conclusion, I would like to explain some of the more common characteristics of their thoughts of learning. This time I will place half of content in Part 2.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000105-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 投 稿 論 文 —

江戸時代の学習思想（その2）

——陽明学派の人々を中心に——

— 渡 辺

弘* —

The Thought of Learning in the Edo Period (Part 2)

—A Study on “The Yomei-Gaku School”—

Hiroshi Watanabe

In this paper, I will investigate the thought of learning in the Edo period in which it is thought, from the educational view point, that people learned through activity and independence. Education in this case means supporting people intellectually and emotionally in order to allow them to live a good life.

In Analyzing the thought of learning in the Edo period, firstly, I will take some people as example who were receptive to the thought of “the Yomei-Gaku School”, which was one of the Confucian schools founded in the Edo period. Secondly I will inquire into both their views of the world (universe) and views of human beings, in order to determine the basis of how their thoughts of learning were formed.

In accordance with my previous research, and in conclusion, I would like to explain some of the more common characteristics of their thoughts of learning.

This time I will place half of content in Part 2.

* 宇都宮大学教育学部教授（教育学，日本教育史）

1. はじめに

本論の課題は、江戸時代の学習思想を、特に「教育」という視点から、陽明学派と呼ばれる人々を中心に考察することにある。すでに拙論「江戸時代の学習思想（その1）」（『哲学』第99号、1995年9月所収）において、序論で主に「教育」の視点について、1で「陽明学」の思想と江戸時代の「陽明学派」について、そして2で中江藤樹と熊澤蕃山の宇宙（世界）観・人間観と学習思想のそれぞれの特徴を検討した。

今回は、残りの3名—佐藤一斎、大塩中斎、横井小楠—について同様な視点から吟味し、その上で前回の2名と合わせ5名に共通した宇宙（世界）観、人間観、学習思想の特徴を考察したい。

2. 陽明学派の学習思想——「宇宙（世界）観」・「人間観」に基づいて——

(1) 佐藤一斎の場合——『言志四録』*——

(a) 宇宙（世界）観・人間観

① 宇宙（世界）観

一斎の宇宙（世界）観を概観する場合、その中心となる概念は「天」である。『言志四録』の中にも、たとえば「天行の如く」「天を以て感じ」「天を以て動く」といった表現が多く見られることからわかる。

では、一斎のいう「天」とは、彼の宇宙（世界）観と関連させて考えた場合、どのような意味をもつのだろうか。これに関して、次に紹介する『言志四録』からの二つの引用文は、それを解く一つの手がかりとなると思われる。まず第一の引用文は、次の内容である。

「不定にして定まる、これを无妄と謂ふ。宇宙間に唯この活動理あり

*『言志四録』……彼が42歳から80歳まで、文化10(1813)年から嘉永4(1851)年まで書き続けた箴言集で、「言志録」「言志後録」「言志晩録」「言志叢録」の四編からなる。

て充塞し、万物これを得て以てその性を成す。所謂、物ごとに无妄を
与ふ、なり。」⁽¹⁾

この引用文中の「无妄」とは、「無妄」ということであり、すなわち
「妄」は「道理にはずれている。でたらめ。いつわり。」といった意味であ
るから、「無妄」を別な言葉で言い換えれば、「至誠」ということになる。
これが、まさに「天」なのである。それは、宇宙間に充塞する活動理であ
り、万物が性を成す根源であるということである。

次に、第二の引用文を紹介しよう。

「これ正にこれ我が神光靈昭の本体、性命も即ちこの物、道德も即ち
この物、中和位育に至るも、また只これこの物の光輝の宇宙に充塞す
る処ならん、と。」⁽²⁾

この文章中の「中和位育」とは、全宇宙の自然秩序がいささかの乱れも
なく、万物がそれぞれに生育をとげあうという意味であり、つまりは、天
は宇宙に充塞し宇宙を主宰するものと考えられたのである。一斎は、これ
を「神光靈昭」あるいは「靈光」と呼び、宇宙の内に存在する人間に内在
する本来的な自己（真我）を意味するという。

これら二つの引用文から、一斎のいう「天」をまとめれば、全宇宙の秩
序、生成の「主宰者」的存在ということが出来る。

この他にも、一斎は、「天」を最高の師とみなしている。では、どのよ
うに天を師とするのか。それについて一斎は、无妄靈光なる天への帰一と
天行のごとく生きることを提案する。

その背景には、やはり「心則天」という天人合一的な考え方があり、
「心の来処は、乃ち太虚これのみ」⁽³⁾と、宇宙（天地）の本体を「太虚」と
いう言葉で表現している。そして、その本質を気の集合体と考える。

さらに一斎は、天地陰陽がまだわからない以前の総体として「太極」と
いう概念を用い、それについて次のように説明している。

「浩然の気（天地間に拡がる至大至剛の気）の如きは、専ら運用を指

すも、その実は太極の呼吸にして、只これ一の誠なるのみ。これを気原と謂ふ。即ちこれ理なり。』⁽⁴⁾

ここでいう「太極」は、実体としては気であり、陰陽二気が生じ万物が生じる根源であるから「気原」ともいう。

② 人間観

では一斎は、この書物の中で人間をどのように見ているのだろうか。その特徴は、先の二者（中江藤樹、熊澤蕃山）と同様に、まず性善説的の人間観に立ちながら、天に従って生きる肉体を有する存在という見方である。

本文中において、「性の善なる」「性は善なり」という表現がしばしば見られる⁽⁵⁾。さらに彼は、「性は善なりといへども、體殻なきときはその善を行ふ能はず。』⁽⁶⁾と述べているように、身体そのものを否定してはいない。ではなぜ人間は悪を行うのか。それについて続けて、「體殻の設は、もと心の使役に趨きて以て善を為し、また過不及あるに由りて悪に流る。』⁽⁷⁾と述べている。つまり、悪の問題は「心の使役」によって生じる「過不及」（すぎたり足りなかったりすること）の問題に起因するということである。では「心」とは何か。彼はそれを人間に内在する「天」そのものであり、また「真我靈光」と呼ぶ。彼が、「真我靈光」を説明しているところを以下にいくつか引用してみたい。

『『人心の靈、知あらざるはなし』と。只この一知、即ちこれ靈光。嵐霧の指南と謂ふべし。』⁽⁸⁾

「端坐して内省し、心の工夫を倣すには、宜しく先ず自らその主宰を認むべきなり。省する者が我か、省せらるる者が我か。心は固より我にして、體もまた我なるに、この言を為す者は果して誰か。これをこれ自省と謂ふ。自省の極に、乃ち靈光の真我たるを見る。』⁽⁹⁾

「靈は、即ち真我なり。真我は、自ら知りて、醒・睡に間てらるることなく、常靈常覚にして、万古に亙りて死せざるものなり。』⁽¹⁰⁾（以上傍点引用者）

これらの内容から、「真我」とは真実の自己ということであり、自己に内在しつつ、自己をこえるものであり、それはまさに「靈光」を意味するのであり、われわれが端坐して内省する時にはじめて認められる自己の「主宰」であり、嵐霧の中における人間のあり方や生き方を「指南」してくれる働きである。そして、それはまた「万古に亙りて死せざるもの」、つまり永遠に求めるものであるということである。彼によれば、人間とはこうした働きを内在した存在であったのである。したがって、彼のこのような人間観に基づいた人生の究極的目的とは、真我靈光の主宰性の確立にあったといわなければならない。

以上のことから、彼にとっての「学問」とは、こうした自己を確立するための手立てであったと考えられる。

(b) 学習思想

では、人生の究極的な目的としての、真我靈光の主宰性の確立をめざした学習（学問）について、一斎はどのように考えていたのだろうか。

まず、彼も先の二者と同様に、「学は己の為にするを知るべし。学、己の為にするを知る者は、必ずこれを己に求る。」⁽¹¹⁾と述べているように、学習（学問）は他人のためにではなく自分自身のために行うものであるという立場にたっている。そして、学習（学問）にとって重要なことは、「心を把りて以て心を治む」⁽¹²⁾こと、「自得を貴ぶ」ことと述べている。では、どのような姿勢で学習（学問）に取り組むべきであると述べているのだろうか。それを示唆する文章を次にいくつか紹介してみたい。

「人となり沈静なる者は、工夫は尤も宜しく事上磨鍊*を勉むべし。」⁽¹³⁾

「恢豁**なる者は、則ち工夫は宜しく静坐修養を忘れざるべし。」⁽¹⁴⁾

* 事上磨鍊……者ごとに対処するその現場で、あるべき自己を錬磨すること。王陽明が主張したこと。

** 恢豁……精神的な活動が多方面に広いことをさす。

「慎独の工夫は、当に身の稠人広坐***の中に在るが如きと一般なるべし。」⁽¹⁵⁾

「特立独行****して、高く自ら標置するが若きは、則ちこれを中行*****と謂ふ可からず。」⁽¹⁶⁾

これらの文章を総合して、一斎の学の姿勢について考えをまとめれば次のようになるかと思う。すなわちそれは、天に対して慎みの気持ちを持ち、過不及なく中庸を保ちながら自己を信じ、自己を磨き修養していこうとする姿勢である。

次に、では彼はどのように学習（学問）を進めていったらよいと考えているのだろうか。それについて次のように説明している。

「学は一なり。而れども等に三あり。初めには文を学び、次には行を学び、終りには心を学ぶ。然るに、初めの文を学ばんと欲するは、既に吾が心に在れば、則ち終りの心を学ぶは乃ちこれ学の熟せるなり。三ありて、而も三なし。」⁽¹⁷⁾

「学を為すの初めは、固より当に有字の書を読むべし。学の為すことを熟したれば、則ち宜しく無字の書を読むべし。」⁽¹⁸⁾

このように学習の順序には三段階あり、「文」から「行」へ進み、最後に「心」を学ぶということである。しかし、これらは個々別々のものではなく、特に初めの「文」の学習は、そもそも人間にそれを学ぼうとする潜在的な気持ちあるいは意欲があるからであるとい斎は述べ、「心」の学習の段階は、その延長線上の円熟したものであるという見方をする。さらに彼は、こうした学習（学問）とは、人間が永遠なる課題であることも触れて次のように述べている。

「この（疑の意味）道は窮りなく、学もまた窮りなし。」⁽¹⁹⁾

*** 稠人広坐……多くの人が集まっている場所。

**** 特立独行……世俗にしたがわず自ら信ずるところを行う。

***** 中行……過不及のない中庸の行い。

「天道は窮まり尽くることなし。故に義理も窮まり尽くることなし。義理は窮まり尽くることなし。故にこの学も窮まり尽くることなし。」⁽²⁰⁾

以上、一斎の学習思想の特徴について考察した。

(2) 大塩中斎の場合——『洗心洞筭記』*——

(a) 宇宙（世界）観・人間観

① 宇宙（世界）観

中斎の宇宙（世界）観の中核には、「太虚」という概念がある。これは、「明体適用」としての実践の重視と合わせた、彼の思想の二大特徴といってもよい。

中斎は、『筭記』の冒頭から、この「太虚」について次のように論じている。

「天は特に上に在りて蒼蒼たる太虚のみにあらざるなり。（中略）人心の妙は天と同じきこと、聖人に於て験すべし。常人は則ち虚を失へり。」⁽²¹⁾

このように、中斎は、宇宙の本体を「天」「太虚」と呼び、それ自体同時に人間の心の本体であるとも考えた。

さらに彼は、太虚と気は分けられない不二のものと見ようとする。次の文章は、それを表している。

「太虚の糸因蘊（凝集の意）息吹は気なり。此の気は千変万化の根本と為るなり。真に其の不二を知れば則ち有も後に非ず、無も先に非ず、隠も体に非ず、顕も用に非ず。」⁽²²⁾

このように、中斎は、太虚の運動は気の運動であり、気から万物が生成

*『洗心洞筭記』……これは、いわゆる大塩平八郎の乱より4年前すなわち天保4（1833）年41歳の時刊行されたものである。そしてこれは、経書の注釈ではなく、個人的発言の書であり、彼の思想の生な姿をもっとも端的に伝えるものであるといわれている。

するわけであるが、太虚のないところには気はなく、また気を切り離して太虚を語ることもできないというのである。

また、この太虚は、形象のないものであり、目に見えないものであるという。では、「空」なのかといえば「空に非ず」⁽²³⁾ということであり、「太虚の靈氣は未だ嘗て一たびも息むこと」⁽²⁴⁾のないもので、変化しながら万物を生成し、循環してやまないものであるという。つまり、中斎のいう「太虚」とは、総合していえば宇宙の存立の根拠であり、宇宙に充満する「包括含容」⁽²⁵⁾の対象と考えられる。

以上のような「太虚」を中核として宇宙存在の原理を考える中斎は、人間の生き方をこれに結びつけていく。すなわち、人間の心の本体を「太虚」としてとらえ、「心虚」とも呼び、「帰太虚」（太虚に帰すること）が人間性回復の原点であると考えてるのである。それは、この「太虚」の徳である「仁」と「致良知」によって展開されるものと、彼は認識したのである。

② 人間観について

では次に、中斎の人間観について考えてみたい。彼の人間の見方の中核となる概念は、「良知」と「仁」である。

まず「良知」は、陽明学の中核をなす概念であり、すでにこれまで紹介してきた人物の思想にも見られたものである。では中斎の場合、どのような点に彼の特徴が考えられるだろうか。彼においても、基本的な良知観としては「良知良能は、もと自ら之れ有り。」⁽²⁶⁾あるいは「良知の各おの具備すること、地中の水の如く、有らざる無し。」⁽²⁷⁾というように、人間みな具備しているものであり、その働きは「是を知り非を知り、善を知り悪を知る」ことであるという認識の上に立脚していることは明らかである。彼の場合、その働きを「太虚の靈明」と呼んでいる。これは、先の一斎の「靈光」に類似したものと考えられる。

では、特に強調した点は何か。それが、「良知を致す」（致良知）ということであった。これは人間の基本的な生き方に関わるものであり、とりわ

け実践的な側面を強調した表現であるといってもよいだろう。事実、本文中にもこの言葉がしばしば見られる。これは、良知を喚起し、良知に従い実行することであり、そこに「知行合一」の理念があるといわなければならない。彼は、「良知を致すことの難きは、水に逆ふ舟の如く、惰れば則ち退いて進まず。」⁽²⁸⁾と述べて、「良知を致す」ことは人間にとって自然であり、それに逆らうことによって問題となると説明している。つまり、人間がこの「良知」に生きる時、「帰太虚（心虚）」の実現を見るのであり、「気質を変」することが可能となると、彼は考える。その場合、姿勢としては、「心虚に帰するは、意を誠にし独を慎むより入る」⁽²⁹⁾ことが大切であると述べ、「誠意慎独」を重視する。つまりそれは、常に徹底的に私意私情を排除して良知に対して誠実に生きていくという姿勢である。

では、さらに是非取捨の働きをもつ良知が、善とした内容とは何か。その中心概念が、すなわち「仁」である。彼は、「仁」について次のように説明している。

「仁は太虚の徳にして、万古不滅のものなり。」⁽³⁰⁾

「良知の是非取捨は、仁に非ずして何ぞ。故に吾れ断じて曰く、『仁は即ち良知』と。」⁽³¹⁾

すなわち、是非取捨の実践は、内容的に仁の実践であるというのであり、宇宙の本体である太虚、その「太虚の徳」は「仁」であり、良知を致すことを通して、人間もこの「太虚の徳」にいたるというのが、中斎の考え方である。また、彼は孔子を引用して、「仁」は仁義礼智信を「貫くの元」であり、人間の求める徳性もこの「仁」であると説明している。

では「仁」とは何か。それは、一言でいえば他者の痛みを慈しみ思いやる共感的精神ということである。したがって、先の「良知を致す」ということも、結局はこうした共感的精神を持ちながら、誠心誠意知行合一的に生きていくということであると理解できる。こうしたことから、中斎の人間観は、「良知」と「仁」を根本原理としていることがわかる。

(b) 学習思想

以上のような中斎の宇宙（世界）観・人間観を吟味してくると、その流れの中で彼の学習（学問）思想の大枠もおのずと見えてくる。それは、実践行動を重視した「良知」と「仁」を根底とした学習思想ということである。これについてのいくつかの特徴を、次に順に紹介してみたい。

第一は、これまで紹介してきた人々と同様、彼もまた学習（学問）は「己の為」にするものとして理解していたことである。これに関連して、彼は次のように述べている。

「学を好むこと好色を好むが如く、実の心もて己れの為にせば、則ち必ず真に其の道德も亦た天の太虚に出づるを覚らん。」⁽³²⁾

「学は固より己れの心を正しくし、己れの身を修む。」⁽³³⁾

『程子曰く、君子の儒は己れの為めにし、小人の儒は人の為めにす』の説は、既にし得て了せり。而して『己れの為めにす』とは、即ち明德を明らかにするなり。明德を明らかにするは、即ち良知を致して自ら慊くするものなり。」⁽³⁴⁾（以上傍点引用者）

第二は、学習（学問）は、「太虚に帰する」ための行為であるということである。彼は、それに関して、「学びて太虚に帰すれば、則ち人の能事畢る。」⁽³⁵⁾と説明している。これは、本来の自己に帰るために学習（学問）が必要であり、それによって人間は真に為すべきことを為しつくすことになるという意味である。

第三は、学習（学問）は、太虚の徳、つまり仁をその中心として仁義礼智信を明らかにすることであると、彼は考える。それに関して、次のように説明している。

「仁なるものは、即ち太虚の生（万物を生ずる働き）。義なるものは、即ち太虚の成（万物を育成する働き）。礼なるものは、太虚の即ち太虚の通（万物を広く大きく位置づけてそれぞれに所を得しめる働き）。智なるものは、即ち太虚の明（万物を聡明ならしめる働き）。信なる

ものは、即ち一（万物に一貫した誠実さを与える働き）。これ皆太虚の徳の用なり。而して人皆之備ふ。学ばざれば則ち昏黒にして長夜の如く、生きざると異なるなし。是の故に学びて其の徳に率ひ以て之を行へば、始めて之を生人と謂ふなり。」⁽³⁶⁾

こうした「仁」「義」「礼」「智」「信」という五つの徳に従って学び行うことによって、人間は善く生きることができるということである。

第四は、先の第三とも関連するが、学習（学問）は良知を明らかにするために行うことであるということである。これについて、本文で詩文の学習について関連させて次のように述べている。

「学人は先ず其の良知を明らかにして、而して平日心に蘊へしものを以て、物に触れ事に感じ、吐いて詩文と為せば、則ち詩文は乃ち学を助け、聖道に於て何の害か之れ有らん。若し亦た良知を明らかにせず、而して徒らに筆墨を弄し、以て名を売り誉れを求むれば、則ち道と大いに背馳す。」⁽³⁷⁾

この文章から、中斎が詩文の学習も、その根底に良知を明らかにすること、つまり「明德」を考えていることは確かである。もしそれに即した詩文の学習でなければ、人道から乖離したものとなると警告している。

第五は、学習（学問）は、人間の気質を変化させるためであるということである。彼は、人間は太虚をその本体としてみな同一であるが、気質、つまりさまざまな気によって構成される現実の物質的な側面は「清濁昏明」であるとして、その気質をより善い方向に変えることが重要であると主張し、次のように説明する。

「人学びて気質を変化すれば、則ち聖人と同じきもの、宛然*として偏布照耀**し、包涵***せざるなく、貫徹せざるなし。嗚呼、気質を

* 宛然……さながら、そっくりそのまま。

** 偏布照耀……あまねくゆきわたって照り輝く。

*** 包涵……つつみこみ、ひたす。

変化せずして学に従事する者は、其の学ぶ所は、将た何事ぞ。陋と謂ふべし。』⁽³⁸⁾

以上、中斎の学習思想の特徴を紹介した。加えて、これらは、あくまで「知行合一」「道德功業」「学問力行」「明体適用」「窮行心得」といった実践行動を目指してのものであったことを付け加えておきたい。

(3) 横井小楠の場合——『学校問答書』*『沼山対話』**「沼山閑話」***——

(a) 宇宙（世界）観・人間観

① 宇宙（世界）観

小楠の宇宙（世界）観は、彼の『沼山対話』（井上毅との対談）と『沼山閑話』（元田永孚との対談）の中に、その一端が見られる。

彼の宇宙（世界）観の最も大きな特徴は、「堯舜孔子三代の道」への回帰にあるといってよい。そうした考え方が登場してくる背景には、観念的形式論に走っていた当時の儒教に対する批判があるといえる。これに関して、彼は『沼山閑話』の冒頭で次のように述べている。

「宋の大儒、天人一体の理を發明し其説論を持す。然ども専ら性・命・道理の上を説て、天人現在の形式上に就て思惟を欠に似たり。其天と云ふも多く理を云、天を敬すると云も此心を持するを云ふ。格物は物に在るの理を知るを云て、総て理の上・心の上のみ専らにして、堯舜三代の工夫とは意味自然に別なるに似たり。』⁽³⁹⁾

*『学校問答書』……嘉永5(1852)年越前福井藩において学校を興そうとする議があり、有志が小楠に書簡を送って学校の制度について質問したのに答えたものが本編である。

**『沼山対話』……元治元(1864)年秋のある日、熊本藩校時習館居寮生だった22歳の井上毅が、熊本の東南8キロの沼山津（現、熊本市秋津町）に閑居中の小楠（56歳）を訪ねて古今の学問、西洋の文物宗教をはじめとする諸情勢、鎖国と開国貿易などについて意見を聞き、自ら筆記したものが本編である。

***「沼山閑話」……慶応元(1865)年晩秋の一日、元田永孚はかねて敬愛する小楠を沼山津にたずね終日論を交わしたが、そのうちの一、二の梗概を後日の思い出にそなえるため筆記したものが本編である。

このように、現実を直視せず、その上で人間の本性や人命や物事の筋道といったことが、思弁的観念的にこれまで論議されてきていることを批判し、そうした枝葉末節的な議論以上に最も大切な問題に立ち返ることを提案する。

では、彼の主張する堯舜孔子三代に帰ることとはどのようなことなのだろうか。宇宙（世界）観を中心に考えてみたい。

その中心となる概念は、「天」である。ある意味で、小楠の思想は「天」の原点に立ち返る思想といってもよい。

まず彼は、「天」は「往古来今不易の一天なり」⁽⁴⁰⁾と記しているように、太古以来今日に至るまで変らないものであると考える。そして、この「天」、すなわち宇宙の理法ともいうべきものを「天理」と呼ぶ。この「天理」は、人間の心の内にもあり、人間の心の誠は宇宙間のことすべてに感応する。したがって、「格物」が可能となると考える。ここには、天人合一的思想及び「物を格す」という陽明学の特徴が見られるといってもよい。

さらに小楠は、その宇宙の理法（天理）は「仁」によって貫かれていると考える。太陽が万物を暖めて生育させることも、それは「天日の恩」であり、まさに「天地有生の仁心（天地が万物を生ずる仁の心）」の働きなのであり、「仁」は己を捨てて他に対することによってはじめてあらわれる働きであるとする。それを、小楠は「公平無私の天理に法」という。

また彼は、「人に生まれては人々天に事ふる職分なり」として、「是（天）道は往古来今一致なり」⁽⁴¹⁾という。では、「天に事ふる」とはどのようなことなのか。その基本的姿勢として、彼は次のように述べている。

「堯舜三代の心を用ゆるを見るに、其天を畏るる事、現在天帝の上に在せる如く、目に視、耳に聞く動揺・周旋、総じて天帝の命を受る如く自然に敬畏なり。」⁽⁴²⁾

つまり、現実には天帝がそこにいらっしゃるように畏れて、現実の動揺変転を、みな天帝の命を受けたものとして自然敬畏することが大切であると

いう。その上で、現実において「天帝の命を受けて天工を広むるの心得」を以て、すなわち天帝の命令を受けて、天帝に代わって工作工夫をこらすというつもりでさまざまなことを行うことが、人間にとって重要なことであると考えてるのである。ここには、天地万物一体の仁という思想が見られる。

② 人間観

次に、小楠の人間観を先の三書を通して概観してみたい。

彼は、人間とは「天体の一小天」であり、「天を以て心とす」る存在であると考えている。では、天の心とは何か。それは「仁」であり、「仁」はまた人間内部にも存在する。その人間の心的な働きを、彼は「惻怛の誠（良心）」と呼ぶ。「惻怛の誠（良心）」とは、いたみかなしむ心の働きである。これに関して次のように述べている。

「我惻怛の誠にひびき候て、今日千緒万端見聞する処の者、皆我心の働きと相成候。」⁽⁴³⁾

「我が惻怛の誠は宇宙間のこと皆是にひびかざるはなき者に候。」⁽⁴⁴⁾

このように彼は、惻怛の誠は我心の働きであり、それはいわば宇宙間の理と響き合うものであり、「我分内」のものであると考え、人間すべてが有している働きであると理解するのである。また彼は、こうした心の働きを、他に「天資」「澄心」「虚心」という用語で表現している。

さらに彼は、この本来の性ともいえるべき「惻怛の誠（良心）」の具体的な働きとして「思」を強調する。「思」とは、己の惻怛の誠（良心）に照らして物事を考え判断するということである。実際本文中に、「専ら己に思ふべく候」⁽⁴⁵⁾のように、「己に思ふ」という言葉が多く見られる。こうした働きを積極的に働かせることが人間の本来の姿であり、もしそうでなければ「天下の理に昏」くなると指摘している。

以上、小楠の人間観の一端を見てきたわけである。これに基づいて、次に彼の学習思想について吟味してみたい。

(b) 学習思想

先に紹介した三書には、小楠の学習についての考え方がよく現れている。それに関するいくつかの特徴を、次に紹介したい。

まず第一は、学習（学問）は「為己」であるという考え方である。これに関する興味深い内容が『学校問答書』の中に見られる。

彼は、学校は学政一致を主として考えるべきではないかという質問を立てて、次のように答えている。

「政事の有用に用んとの心直様一統の心にとおり候て、諸生何も有用の人材にならんと競立、着実為己の本を忘れ、政事運用の末に馳込、其弊互に忌諱娟疾を生じ、甚しきは学校は喧嘩場所に相成候。」⁽⁴⁶⁾

この内容から、小楠は、学校がもし政事に役に立つための人材の養成機関と化せば、そこにはさまざまな問題、つまり学校が政事運用のための道具となり、学生がこびたりしっとしたりしはじめ、あげくの果てには「喧嘩場所」となってしまうと警告していることがわかる。それはどこに問題があるか。それについて彼は、「為己の本を忘れ」ところにあると考え、つまり彼は、「学校」とは、「覇術功利の政の心」⁽⁴⁷⁾で起こされるものではなく、まず「為己」ために設けられるべきものという確固たる認識の上に立っている。さらに続いて、彼は「学問」についてこう論じている。

「学問と申すは、修己（おのれをおさむる）の事のみにて、書を読み其義を講じ、篤実謹行にして心を世事に留めず、独り自修養するを以て真の儒者と称し、（以下略）」⁽⁴⁸⁾

「修己」「修養」という言葉でもわかるとおり、これまで紹介してきた人々と同じように、ここでも学習（学問）は自分自身のために行われる行為であると考えられていることがわかる。この他にも、「自得」「自家修養」「良心培養」「修為」といった言葉によって同様の意味が表されている。

第二は、学習（学問）に際して「己に思ふ」ということを重視している点である。次の引用文はそれをよく表している。

「一通の書を読得たる後は、書を抛て専ら己に思ふべく候。思ふて得ざるときに、是を古人に求め書を開きてみるべし。心の誠より物理を求むる処切なれば、必中夜にも起て書を閲するほどになるものに候。右様致し候えば我知覚も日々にひろまり、学問の精神ひたすら増長致すものなり。己に思はざれば学問の益なく、又思ふに、是を古人に照さざれば一己の私智になることもござ候。」⁽⁴⁹⁾

この内容からも明らかなように、小楠は、学問を増長させるためには、まず書を読み、そして「己に思ふ」、つまり人間内部の「惻怛の誠（良心）」に照らしてそれについて深く考え、さらに「一己の私智」とならないために、再び古人の書に照らすことが重要な姿勢であると説明している。別な箇所においても、彼は「学は思を以て業と致す」⁽⁵⁰⁾ ことを強調する。

第三は、学習（学問）において、「知る」と「合点する」ことを区別して、後者を重視している点である。それに関するものが次の引用文である。

「学問を致すに、知ると合点との異なる処ござ候。天下の理、万事万変なるものに候に、徒に知るものは、如何に多く知りたりとも皆形に滞りて、却応物の活用をなすことあたはざるものに候。合点と申すは、此の書を読んで此の理を心に合点いたし候えば、理は我物になりて、其書は直ちに糟粕* となり候。」⁽⁵¹⁾

小楠は、「知る」と「合点する」と、つまり理解することとは、意味上異なるというのである。それは、この引用の内容の通り、たとえば人間が多く知識をもっていたとしても、その根本的な原理や道理を認識しなければ、それらの知識は「形に滞りて、却応物の活用をなすことあたはざるもの」、すなわち外形的なものに拘泥して具体的なものに対して応用できないものになってしまうということである。それに対して、「合点」

* 糟粕……酒かす。のこりかす。つまらないもののたとえ。

とは、もし書物を読み、そこからその根本の道理・原理を認識し、それらが自分に身につけば、その読み終えた書物は「糟粕」、つまりのこりかすになってしまうということである。すなわち、後者の場合の知識とは、あくまで人間が善く生きていくためのいわば手がかりであり、最終的に学習（学問）は書物から離れるべきであると考えられている。ここに、小楠の学習（学問）に対する重要な考え方の特徴があるといわなければならない。

以上、99号と本号において江戸時代の陽明学派から五名を選び、彼らの宇宙（世界）観・人間観に基づいて、彼らの学習思想の一端を考察したわけである。

これらをもとにしながら、第一に宇宙（世界）観・人間観の特徴を、第二にそれに基づく学習思想の特徴を、それぞれ共通した点を探りながら吟味してみたい。

3. 共通した宇宙（世界）観・人間観

まず、第一の共通した思想的特徴を、宇宙（世界）観・人間観において、それぞれ考えてみたい。それぞれ表現こそ違え、そこに共通した思想的特徴を見出すことができることに気づく。

(1) 宇宙（世界）観において

では、ここに掲げた五名の宇宙（世界）観の共通した特徴から考えていくことにしたい。これを鮮明にするために、便宜上、それぞれの人物が宇宙（世界）観を言い表すために使用しているキーワードを以下に列举してみたい。

① 中江藤樹

- a. 孝 b. 太虚 c. 太虚神明 d. 天命 e. 天道 f. 天徳
g. 天理 h. 天則 i. 皇上帝 j. 天神地示 k. 純粹至善

② 熊澤蕃山

- a. 万物一体 b. 太虚 c. 一気 d. 仁 e. 我心則太虚
f. 天地四海我心中 g. 天道 h. 太極

③ 佐藤一斎

- a. 心則天 b. 无妄 c. 神光靈昭 d. 中和位育 e. 靈光
f. 太虚 g. 浩然の氣 h. 誠 i. 太極

④ 大塩中斎

- a. 太虚 b. 天 c. 氣 d. 包括含容 e. 心虚 f. 歸太虚
g. 仁 h. 致良知

⑤ 横井小楠

- a. 天 b. 往古来今不易の一天 c. 仁（の功用） f. 天日の恩
g. 天帝 h. 天上 i. 宇宙皆我分内 j. 六合

ここで、第一に気づくことは、いずれも「天」に着眼していることである。それは、「天道」をはじめ「天」を用いた用語が数多く見られることからわかる。そして、その「天」は、地上を覆う空間という意味だけではなく、万物を貫く大自然の道理や力をも意味している。

第二は、横井以外その天地（宇宙）の本体を「太虚」と呼び、その本質を「氣」の充満したもの、「氣」の集合体というように「氣」と積極的に結びつけて万物生成の根源としていることである。ただし、「太虚」を説明する際の表現の仕方は、「太虚即孝」「皇上帝」（中江）、「一気」「我心則太虚」（熊澤）、「靈光」「心の来処」（佐藤）、「糸因蘊息吹の氣」「包括含容」「心虚」（大塩）、といったようにさまざまである。

第三は、上記のような「天」や「太虚」との関わり方の上で、人間の内的性質（心）を考えていることである。つまり、天人合一の立場に立っているということである。たとえば、中江の場合は、「天道の子孫」として人間をとらえ、その性も天道の「純粹至善」を受け継いでいるといい、熊澤も「我心則太虚」「天地四海我心中」といい、佐藤も「心則天」といい、大塩も「心虚」といい、そして横井もまた「宇宙皆我分内」「天を以て心

とす」と表現している。

第四は、「天」「太虚」の本質を、畏敬の念をもって「純粹至善」「仁」「良知」ととらえており、人間の本性も同質のものとして考えられていることである。合わせて、それに対する畏敬の念をもっているのである。

以上、共通した宇宙（世界）観を整理してみたわけである。これに基づいて、次に人間観の共通した特徴について考えていくことにしたい。

(2) 人間観において

人間観においても、先の宇宙（世界）観と同様、まずはじめに、各人物の人間観に関わる特徴的な内容を整理し、その上で共通点を考えることにしたい。

① 中江藤樹

- a. 人間は、「純粹至善」としての根本の「天道」の「えだ葉」的存在である。
- b. 「良知良能」は、人間だれにも有しているものである。
- c. 「悪人」と呼ばれるものは、「邪欲におぼれ」たり、「人欲のまよひ」が深いために本心の良知が曇るために起こる。
- d. 「善をこのむ」ことが人間の本性である。

② 熊澤蕃山

- a. 人間の本性は善である。
- b. 人間は、みな「明德」の働きを備えている。
- c. 「良知良能」は世俗みな有している。
- d. 人間は、天地太虚の理気を受けて生じた存在であり、氣質的な側面と理性的な側面がある。

③ 佐藤一斎

- a. 人間は、天に従って生きる肉体を有する存在である。
- b. 人間は、「天」＝「真我靈光」を内在している存在である。

④ 大塩中斎

- a. 人間は、心の本性として「心虚」を有している存在である。
- b. 人間には、「帰太虚」つまり本来的な自己に帰ろうとする働きがある。
- c. 人間は、すべて「良知良能」を備えている。
- d. 人間は、「致良知」的存在である。
- e. 人間は、「誠意慎独」を生き方の重要な姿勢としている。

⑤ 横井小楠

- a. 人間は、「天体の一小天」であり、「天を以て心とす」る存在である。
- b. 人間は、内部に「仁」（惻怛の誠〈良心〉）を備えている。
- c. 人間には、自己の「惻怛の誠〈良心〉」に照らして、物事を判断する「思」という働きがある。

以上、それぞれの人間観の特徴を整理してみると、そこに表現こそ違え思考上の原理においていくつかの共通点が見られる。

まず第一の特徴は、先の宇宙（世界）観でも触れたように、人間の内的性質（心）が、宇宙を貫く「天」と積極的に関連づけられて考えられている点である。すなわち、天の心＝人間の心という考え方である。たとえば、一斎の「天」＝「真我靈光」、中斎の「太虚」（天）＝「心虚」、そして小楠の「天を以て心とす」という表現には、その一端が見られる。

第二は、人間の心の働きを、「良知良能」「良心」と表現しているところである。一斎の場合、ここで取り扱った文献にはそれらの言葉は見られなかったが、「真我靈光」という言葉がそれに匹敵すると、私は理解する。

第三は、人間は、こうした「良知良能」「良心」に照らして物事を思考する内的働きを有しているという点である。小楠は、それを「思」という言葉で表している。この他にも、人間の内的な性質として、「誠意慎独」（私意私情を排除して良知に誠実に従うこと）や「惻怛の誠」（いたみかなしむ心の働き）を重視している点などがあげられる。

以上のことを総合して考えた場合、そこに見られる共通した人間観とは、天と人間との本質的同一性を前提として、「良知良能」「良心」の働きを内部に備え、積極的にそれを働かせようとする主体であると考えられる。

4. 学習思想の特徴

江戸時代の学習思想の特徴を、陽明学派の主な人々の思想を通して考察するにあたり、宇宙（世界）観→人間観→学習観という一連の流れの中で吟味することが重要であるという考えから、前章において共通した宇宙（世界）観・人間観の内容を検討したわけである。

とりわけ特徴的な点としては、宇宙（世界）観においては「天（道）」を中心とした見方であり、人間観においては天人合一の立場から「良知良能」「良心」の働きを内部に備えた存在という見方である。

こうした見方を踏まえた人間にとっての「学習（学問）」についての考え方の共通した特徴とはどのようなものであったのだろうか。最後に考えてみたい。

まず、先の共通した宇宙（世界）観・人間観の吟味の場合と同様、各人物の学習思想において、特に特徴的な内容のものを列挙することから始めたい。以下が、その内容である。

① 中江藤樹

- a. 学習（学問）の根本は、「明德をあきらかきする」ことである。
- b. 学習（学問）は、「為己慎独」（人に知られるために学ぶのではなく、自己の人間性の完成のために自分ひとり誠実に見つめながら学ぶということ）である。
- c. 学問は、人間第一の急務である。
- d. 学習（学問）とは、父母の全孝の道を自ら培養・自得することである。

② 熊澤蕃山

- a. 学習（学問）は、「正心修心の志」をもって行うものである。
- b. 学習（学問）は、「自反慎独」である。
- c. 学習（学問）は、「己の為」にするものである。

③ 佐藤一斎

- a. 学習（学問）は、「己の為」にするものである。
- b. 学習（学問）は、「自得を貴ぶ」ことである。
- c. 学習（学問）は、「窮りなき」ものである。

④ 大塩中斎

- a. 学習（学問）は、「己の為」にするものである。
- b. 学習（学問）は、「太虚に帰する（帰太虚）」ための行為である。
- c. 学習（学問）は、「良知」を明らかにするために行うものである。
- d. 学習（学問）は、人間の気質を変化させるために行うものである。

⑤ 横井小楠

- a. 学習（学問）は、「為己」を目的とする。
- b. 学習（学問）は、「己に思ふ」ことが大切である。
- c. 学習（学問）は、「合点する」ことが大切である。

以上の内容から、共通した特徴として第一に気づく点は、学習（学問）が「己の為」として考えられていることである。

「己の為」とは、藤樹の「為己慎独」や蕃山の「自反慎独」でも明らかのように、自分の内部にある良知に照らして誠実にそれを開いていくことであり、博学を誇るためでも、自己の地位名誉や利益のためでもないということである。したがって、各人とも、そうした「為己」としての学習（学問）を奨励する一方で、それに反する学問を「偽」として批判する。たとえば、藤樹が、「博学多才にても、心だて身もち」が世俗的であるような学問への姿勢を批判したり、小楠が学校論を展開する中で、「覇術功利の政の心」をもった学習（学問）を痛烈に批判していることはその一例

である。つまり、「為己」としての学習思想と、知識主義・功利主義的な学習思想とは、いわば相いれない思想であったといつてよい。

第二の特徴は、こうした「為己」としての学習（学問）が、あくまで人間一人ひとりの内的な働きとしての「良知（良心）」に向けられた行為であるということである。先に紹介した内容の中で用いられている言葉、たとえば「明德」「慎独」「帰太虚」「思ふ」「合点」などには、そうした意味が包含されているといえる。

第三には、上にまとめたものに限らず、学習（学問）は「己の為」に行うものであるという考え方を言い表した言葉が極めて多彩であるということである。次に、各人物ごとにその主なものを列挙してみたい。

① 中江藤樹

- a. 志学 b. 切磋琢磨をはげます c. 開悟の自得
- d. 身をたつる e. 培養 g. 為己慎独 h. 身を修むる
- i. 明心見性 j. 修心煉性 k. 存心養性

② 熊澤蕃山

- a. 立身行道 b. 存養 c. 省察 d. 自反慎独 e. 涵養
- f. 自得 g. 志学 h. 入徳 i. 問学 j. 正心修身
- k. 養生 l. 独知 n. 己を修むる

③ 佐藤一斎

- a. 立志 b. (深造) 自得 c. 省心 d. 独立自信
- e. 己を修むる f. 存養 g. 徳性を尊ぶ h. 問学
- i. 学問修為 j. 摂養 k. 養生 l. 修身 m. 自励
- n. 事上錬磨 o. 静坐修養 p. 善を為す q. 特立独行

④ 大塩中斎

- a. 身を修むる b. 修身 c. 身心の修正 d. 学問力行
- e. 問学 f. 学問精熟 g. 自心自性 h. 己に克つ
- i. 志勉 j. 学習 k. 君徳を修むる l. 教学

m. 気を養ふ n. 性を養ふ o. 明体適用 p. 真修

q. 養生 r. 涵養 s. 進修

⑤ 横井小楠

a. 修己 b. 修養 c. 修己治人 d. 自得 e. 自反力行

f. 致知力行 g. 修行 h. 自家修養 i. 良心培養 j. 修為

このように整理してみた場合、私たちは、「為己」としての学習（学問）に関する用語が多く用いられていることに気づくと同時に、同じ語（語句）が頻繁に使われていることがわかるだろう。中でも、「修」「養」「自」「身」「己」という語や、「自得」「修身」「存養」「培養」「問学」「養生」といった語句は使用頻度が高い。明治後期に強調された「修養」という言葉も、この中に見られる。こうした言葉は、あくまで個人を中核に据えて考えられている。「自」「身」「己」を、「修」め、「養」い、「為」し、「得」て、その全体が「生」ということである。

「学」についても同様、「志学」「問学」「学習」「学問力行」「学問精熟」といった言葉は、人間一人ひとりの問題としての認識に立脚したところから発生したものと考えられる。そこには、明らかに「天」を中心とした宇宙（世界）観、「良知良能」「良心」を中心とした人間観に支えられた、自立的・自発的な学習についての考え方が根本にあったといわなければならない。

5. 結 び

以上、江戸時代の学習思想の一端を、特に「教育」という視点から、陽明学派と呼ばれる人々を中心に考察してきたわけである。

ここでわかることは、各人物とも、時期を多少隔てながらも、思想の根本において極めて共通しているということである。つまりそれは、宇宙（世界）観→人間観→学習思想という一連の流れでいえば、「天」→「良知良能」「良心」→「自立的学習」という一貫した思想である。

ここに掲げた五名が、この時代に特別な思想の持ち主ということではもちろんない。むしろ、時代全体がこうした考え方を各自根本に据えていたと考えるべきであろう。ここでは陽明学派の人々を取り上げたが、朱子学派であれ、国学派であれ、蘭学派であれ、このような一貫した思想を、その根本に備えていたと考えられる。学習思想についていえば、この江戸時代は、まさに個々人の自立的な学習思想に支えられていた時代と呼ぶことができる。

では最後に、こうした考察から、今私たちが考えなければならない教育上の根本的な問題について述べておきたい。

その問題とは、一言でいえば、「受動的な学習の強制」あるいは「自発的学習の抑圧」から、「自立的・自発的な学習」の方向へいかに開放していくかということである。

序説で説明したとおり、「教育」とは、「善く」生きようとする一人ひとりの人間に、それを「善く」しようとして援助する働きかけと考えられる。そこには、「善く」生きようとする一人ひとりの人間、言い換えれば「善さ」を求めて主体的に学びつづける人間を中核に据えた考え方が当然ある。

だが、明治以降のわが国の教育は、そうした一人ひとりの人間の本来の在り方を軽視あるいは無視して、国家が、人間像にしる、内容方法にしる、「善く」するという場合の「善さ」を決定し、それに向かって、詳細に到達すべき目標（段階）を設け、特定の期間を区切って「教え込む」というやり方で突き進んできた。その結果、本来自立的・自発的であるはずの個人の学習が、受動的・非主体的なものと化していったのである。こうした問題を打開するための方策として、さまざまなことが考えられるであろう。その中でも特に、ここで紹介したような世界（宇宙）観、人間観、学習観といった根本的な意識の変革が重要であると、筆者は考える。私たちは、原点に立ち返るという意味で、「天」「良知良能」そして自立的な学

習思想に支えられていた江戸時代を、改めて見直す時期に今来ているといえるであろう。

註

- (1) 家永三郎他編『日本思想大系 46 佐藤一斎 大塩中斎』岩波書店, 1980 年, p. 52.
- (2) 同上書, p. 48.
- (3) 同上書, p. 23.
- (4) 同上書, p. 111.
- (5) 同上書, p. 26.
- (6) 同上書, p. 26.
- (7) 同上書, p. 26.
- (8) 同上書, p. 110.
- (9) 同上書, p. 175.
- (10) 同上書, p. 152.
- (11) 同上書, p. 78.
- (12) 同上書, p. 108.
- (13) 同上書, p. 109.
- (14) 同上書, p. 109.
- (15) 同上書, p. 136.
- (16) 同上書, p. 184.
- (17) 同上書, p. 168.
- (18) 同上書, p. 170.
- (19) 同上書, p. 118.
- (20) 同上書, p. 140.
- (21) 同上書, p. 370.
- (22) 同上書, p. 515.
- (23) 同上書, p. 474.
- (24) 同上書, p. 529.
- (25) 同上書, p. 474.
- (26) 同上書, p. 384.
- (27) 同上書, p. 408.
- (28) 同上書, p. 408.
- (29) 同上書, p. 386.

- (30) 同上書, p. 374.
- (31) 同上書, p. 474.
- (32) 同上書, p. 365.
- (33) 同上書, p. 396.
- (34) 同上書, p. 486.
- (35) 同上書, p. 373.
- (36) 同上書, p. 413.
- (37) 同上書, p. 416.
- (38) 同上書, p. 373.
- (39) 家永三郎他編『日本思想大系 55 渡辺華山, 高野長英, 佐久間象山, 横井小楠, 橋本左内』岩波書店, 1971 年, p. 513.
- (40) 同上書, p. 514.
- (41) 同上書, p. 515.
- (42) 同上書, p. 513.
- (43) 同上書, p. 498.
- (44) 同上書, p. 498.
- (45) 同上書, p. 497.
- (46) 同上書, p. 429.
- (47) 同上書, p. 431.
- (48) 同上書, p. 429.
- (49) 同上書, p. 497.
- (50) 同上書, p. 498.
- (51) 同上書, p. 498.